

～新渡戸記念の～

## 『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第48回『「外界依存性（アンテナ型）と 外界非依存性（羅針盤型）

～ 戦略（根本的な方向付け）と 戦術（その場の対処・処理）～』

今年、福沢諭吉（1835-1901）の没後 120 年にあたる。福沢諭吉は、士分でありながら身分が低いために苦勞した父親を思い、「門閥制度は親の敵でござる」と語っている（『福翁自伝』）。もし彼が生きていたら コロナ時代の今日を何と言うであろうか。「コロナは人類の敵でござる」と言うであろうか!?

初期の癌化細胞はいまだ「行く先を知らない」で過酷な環境にあり、尺取虫のごとく着実に進展していくものが生き残る。外界依存性（アンテナ型）と外界非依存性（羅針盤型）の混在である。アンテナ型は表面に受容器は良く発達しており、豊富な情報量を誇るが非自律的であり、外発的である。内発的で自律的である羅針盤型とは質的に大きく違う。「日本の開化は外発的」（夏目漱石；1867-1916）に偏った末の現代の病理現象に通ずる。「本は一つであり、末は多岐に分かれる。末梢の一つ一つを追いかけていっても、本を見失えばいたずらに疲れるばかり、根本に眼を据える必要がある」は戦略（根本的な方向付け）と戦術（その場の対処・処理）の定義を鮮明にしてくれる。「学は之を励ますに高貴なる意志の感動を要す。功名を目的として、利益の刺激に依りて智能は永久に發育し得べきものにあらず。我が帝国大学の衰凋は其中に高遠な理想の活動せざるに存す」（1898年、内村鑑三）とは教育の現況を展望すれば深く心にしみる。

約 20 年前であろうか？ オスロ（ウィルス肝炎性肝癌）とフィラデルフィア（遺伝性腎癌）における講演と、バンクーバーのブリテイッシュ・コロンビア大学にある新渡戸記念庭園を訪問する機会が与えられた。筆者の3つの研究テーマ（肝発癌、腎発癌、癌哲学）の「過渡期の指導原理と新時代の形成力」探究の旅であった。飛行機の中では『代表的日本人』（内村鑑三；1861-1930）、『武士道』（新渡戸稲造；1862-1933）を熟読玩味したものである。「It is not automatic（原因がある）」& 「It has a process（プロセスがある）」& 「It takes time（時間がかかる）」を「発癌の3か条」として提唱している筆者には「癌細胞から見た人間社会の病理（癌哲学）」への応用である。事業も特

異点における「人為的な介入」によって分岐し、その後の方向性が大きく決定される。まさに「開いた扇」のようである。「段階を超える原理」のポイントがここにある。「起源に忠実」であることはいつの時代も困難である。故に「百年の計」の根拠がある。受動的な「imitate (まねる)」でなく、「like (似せる)」であろうとする「温故創新」に生き、「なすべきことをなそうとする愛」に基づく「地の塩」は、所をかえて 不死鳥の如く出現するであろう。再生細胞が 壊死の中心からでなく 周辺から現れる如くである